

ふるさとの原風景 新発田街道



陸の道「新発田街道」

新発田街道は、新発田城下と沼垂や新潟の湊を結ぶ道であったため、この名で呼ばれています。北区では、笠柳～横井～内島見～木崎～木伏～新崎を通っています。この辺りでは通称「木崎街道」とも呼ばれています。

街道沿いにはハンノキや松が植えられました。夏は日陰をつくり、雪のときには道路の所在を示す目印になりました。

1878(明治11)年に明治天皇の北陸巡幸の経路となり、天皇はこの街道沿いの新崎の古山家(太古山日長堂)や内島見の近藤家(内島見所在所跡)で休憩・屋食をとっています。このとき岩倉具視や大隈重信も随行しました。

現在も、当時の人々が眼にしたのと同じく、広大な田園や遠くに五頭山系の風景が開けます。近代日本の変革期の出来事が偲ばれるメモリアルロードです。

川の道「旧新発田川」

木崎付近には街道に沿った川がありました。旧新発田川です。

江戸～明治時代には、新潟から通船川經由で阿賀野川を横断して遡上し、木崎、そして新発田へと至る舟の通り道でした。人や荷物を運ぶ川舟が行き交い、木崎には舟待ちの人々を相手にした茶屋がありました。1878年、イザベラ・バードは新潟から舟に乗り、木崎で人力車に乗り換えています。

宿場町「木崎」

新潟と新発田の中間に位置する木崎は、新発田街道と旧新発田川が並行する集落です。そのため、江戸時代から交通の要所で、宿場として栄えました。江戸時代に活躍した十返舎一九や幕末の思想家吉田松陰は、旅の途中で新潟～新発田間を通り、木崎に宿をとっています。新潟～木崎間は舟で、木崎～新発田間は陸路を歩きました。

木崎村小作争議 ～新潟県三大小作争議～

木崎村小作争議の経過

明治、大正時代にかけての不況期に先祖から伝わってきた田畑を地主に売り渡して小作人となる農民が続出しました。小作料は収穫高の5～6割にもなり、苦しい暮らしを強いられました。

1922(大正11)年、横井と笠柳の集落では小作料の減免などを求めて小作組合を結成しました。この動きは、翌年には木崎村全域に広がり、木崎村農民組合連合会が結成され、木崎村の名を全国に広めることとなりました。運動は法廷闘争を主とし、小作農民たちは日本農民組合の支援を受けて闘いを続けました。

濁川村の地主 眞嶋家などは、未納小作料請求、耕作禁止、土地返還などの訴訟を起こしました。1926(大正15)年5月には、耕地への立ち入り禁止処分をめぐって、警官隊と組合員が衝突した「鳥屋浦事件」が起きました。

さらに7月、無産農民学校上棟式の夜には、松ヶ崎での「木崎



▲鳥屋浦事件(弾正) 羽田信彌氏作画
事件真相報告演説会」に参加するために行進していた約1,000人の農民達が新井郷川の久平橋にさしかかると、待機していた警官隊に解散を命じられ、混乱の中、三宅正一ら多くの幹部が拘束されました。この「久平橋事件」により小作争議の運動は急速に弱まっていきました。

1930(昭和5)年、地主と小作人の和解が成立し、争議は終了しました。一連の運動は、単

なる小作料をめぐる争議ではなく、「人間として認めてもらいたい」と切望した小作人の政治・教育・農村経営などの民主化を目指した運動でもありました。

無産農民学校

1926(大正15)年5月、組合員たちは、木崎村の教育に不満を抱き、子どもたちを同盟休校させ、無産農民学校を内島見、鳥屋など6カ所で開校し、ここに通わせました。

その後、笠柳の西はずれ、高台の梨畑に無産農民学校の校舎が建設され、同年9月1日に開校式が行われました。50周年記念碑のある場所が、学校の西入口でした。設計はライト式建築の権威、遠藤新工学士で、1階96坪(316.8㎡)、2階12坪(39.6㎡)でした。

校長は賀川豊彦(作家・牧師)、授業は野口傳兵衛、原素行らが担当しました。

しかし、公教育を堅持する立場の県知事と争議指導者の間で、同盟休校の解除、無産農民学校は高等農民学校として存続などの交渉が成立し、9月10日に無産農民学校は閉校しました。

高等農民学校には本科、専修科、研究科が置かれていましたが、入学者が減少し、1927(昭和2)年に閉鎖され、校舎は1936(昭和11)年に取り壊されました。



▲無産農民学校上棟式(1926年7月25日)